

I - A - 21

実験的慢性腎炎に対する漢方方剤の研究(第一報)

近畿大・薬

○野上真里 森浦俊次, 伊藤正明, 吉川正人, 久保道德

目的 腎炎の治療は現在, ステロイド剤をはじめとする種々の薬剤療法がなされているが, 再発しやすく, 難治性でもあることから, 種々の漢方方剤による治療も行われている。

今日, 大部分の腎炎の発症には免疫現象が関与していることから, 薬理学的に免疫学的実験的腎炎が開発されている。最初に開発された代表的な腎炎モデルが, 「馬杉腎炎」で, 抗糸球体基底膜抗体により発症する腎病変である。他に, 「免疫複合体腎炎」と呼ばれるものがある。抗原抗体複合物が種々の条件を満たしたとき, 異物食系系の処理を免れて, 血中を循環し, 糸球体に沈着して起炎されるという, 血清病を代表とする循環免疫複合体(CIC)による腎病変である。今回, この二つの実験的腎炎モデルを作成し, 臨床的に腎機能に影響を与えていると言われている数種の漢方方剤の効果を薬理学的ならびに組織学的に検討した。

材料および方法 「猪苓湯」, 「五苓散」, 「柴苓湯」, 「小柴胡湯」, 「桂枝茯苓丸」, 「当帰芍薬散」, 「越婢加朮湯」のエキス粉末を水に懸濁して用いた。

馬杉腎炎に対する有効性: SD系ラット腎基底膜をウサギに免疫して得た抗腎血清を用いて馬杉型糸球体腎炎を誘起し, 各漢方方剤の予防作用(誘発10日前より投与)および治療作用(誘発10日後より投与)を検討した。Immune Complex型腎炎に対する有効性: Donryu系ラットにウサギ血清アルブミンを用いて腎炎を誘発し, 治療作用(腎炎誘発後より投与開始, 投与期間は30日間)および予防作用(腎炎作成中より投与開始, 投与期間は30日間)を検討した。いずれも効果の判定は, 尿中蛋白排泄量, 血清学的数値および組織学的検討により行った。

実験結果およびまとめ 「猪苓湯」はいずれの腎炎モデルに対しても, 100mg/Kg , 500mg/Kg の経口投与で用量依存的な治療及び予防作用を示した。馬杉腎炎に対しては「五苓散」は 500mg/Kg の用量で, 「猪苓湯」 100mg/Kg に相当する予防効果を示した。Immune Complex型腎炎に対しては「小柴胡湯」「柴苓湯」にも弱いが予防および治療作用が認められた。

以上のように免疫学的に発症する2種類の実験的慢性腎炎に対して, 「猪苓湯」は強い有効性を示し, 臨床使用上興味深い。今後, さらに作用機序を精査する予定である。